



建学の精神

金城学院は、聖書の教えに基づいて、豊かな人間性と深い専門的学識をバランスよく兼ね備えた女性を送り出すことを目的としています。

「福音主義キリスト教に基づく女子教育」

変容の激しい今日の社会にあっても、イエス・キリストの愛、そして聖書によるキリストの教えは、永遠不変のものです。金城学院は、キリストの教えに基づく不変の愛と奉仕の精神を伝え、すべての人々の癒しの担い手となる女性を育成し、社会に送り出すことを目指しています。

「全人的な一貫教育」

人格は、教育によってつくられるものではなく、教育は、内なる可能性を呼び起こして自覚させ、その成長を助けることであると考えます。知識、能力を啓発し、「人間らしい人間」を形成することは大切なことですが、全人教育の根源は、神にかたどりつくられた人の尊厳さを認識させることに目的があります。

「国際理解の教育」

人類は、すべてお互いに重んじ合わなければいけないという考えと、たとえそれぞれの国の体制がちがっていても、すべての国民、民族は平和的に共存できるという理念が教育の前提にあります。事実にもとづき正しい国際理論を深めることによって、世界平和に寄与する人を育成します。

学校法人 金城学院

〒463-8521 愛知県名古屋守山区大森2-1723

TEL : 052-798-0180 FAX : 052-798-4462



創立

金城学院の歴史は、1889年(明治22)アメリカ人宣教師アニー・E・ランドルフが私費を投じ、私邸の中に設立した〈女子専門冀望館〉をルーツとしています。翌年、カンバーランド長老系の〈紅楓女学校〉と合併し、生徒が増えると、ランドルフの女子教育に賛同していた宣教師 ロバート・E・マカルピンは自宅を女学校に開放しました。

1890年(明治23)〈私立金城女学校〉と改称し、生徒も次第に増え、校舎が新築されるなど順調なスタートを切りました。しかし、1891年(明治24)10月の濃尾大地震によって、校舎の一部が損壊。ランドルフもその余震の影響で健康を害し、1892年(明治25)帰国を余儀なくされます。ランドルフが名古屋にいたのは4年間でしたが、この間に女子教育の種を蒔き、金城学院の基礎を築きました。

当時の我が国は女性の教育に対する社会的認識が低く、「女子に学問は無用」などと言われていました。そのような環境に負けず、ランドルフは名古屋の女性に知識、技能とともに聖書の教えに基づいて、感性、徳性なども重視した全人教育を施しました。女性の権利と責任、つまり女性が持てる力をしっかりと社会で発揮しなければいけないこと、世界の平和に貢献しなければいけないことを教えました。

「金城」という校名は、ランドルフによって、黄金のごとく輝きて、城のごとく堅かれという意味でつけられました。

そして戦後間もない1949年(昭和22)金城学院大学が設立されました。単科(英文学部英文学科)から始まった大学も、次第に教育の幅や興行きを広げ、また2005年(平成17)には初の理系学部となる薬学部が開設されるなど女子総合大学となり、建学の精神は脈々と受け継がれています。



金城学院 校章・マーク
1920年公募で選ばれた図案に、当時の校長市村興市がドイツの鉄十字章からヒントを得て考案した。宗教的には、十字架はキリストの贖罪を、白百合はその復活を象徴し、道徳的な意味としては、紅の十字架は誠実・犠牲・奉仕、白百合は純潔の徳を表わしています。

創立の背景と歴史

アニー・E・ランドルフは、現在のウエスト・バージニア州に生まれ、約30年間にわたり学校の教師を務めたのち、1872年(明治5)中国・杭州に渡って寄宿女学校長に就任しました。ところが健康を害して帰路につくことになり、途中、日本に立ち寄って親友のミセス・ランバスを訪ねるために神戸に滞在しました。日本の気候が自分の体に良いことを知ったランドルフは、アメリカ南長老教会宣教師 ロバート・E・マカルピンの誘いを受けて名古屋に移住。当時、マカルピンは日本基督名古屋一致教会(現・日本基督教団名古屋教会)の男子英語塾(冀望館)の英語教師に就任し、岐阜、愛知地方の開拓伝道を行っていました。

〈冀望館〉の英語教師を務めることとなったランドルフは、日本の女性の地位の低さを目のあたりにします。女子教育の必要性を悟ったランドルフは、1889年(明治22)1月女性の英語クラスを開き、8月には男子の〈冀望館〉を閉鎖。〈女子専門冀望館〉に改組し、自費を投じて2間の教室を建てました。最初の女生徒は、3人でした。

彼女は、教育に対して大変厳しい姿勢で臨みました。毎日新しい英単語を覚えさせ、翌日、暗唱できない生徒を後ろの席に変えましたが、生徒たちは反発することなく、最善列に座れるように一生懸命勉強したと伝えられています。ランドルフは中国語は堪能でしたが、日本語はあまり得意でなく、いつも生徒たちを「娘」と呼んだといひます。

ランドルフが名古屋にいた期間は、わずか4年間でしたが、彼女の蒔いた種は大きな実りとなって、女子教育の重要性とともに引き継がれてきました。金城学院は創立100周年記念事業の一つとして、ランドルフ記念講堂を建設し、その名を後世に伝えていこうとしています。

ランドルフを見出したマカルピンは、もう一人、金城学院にとって意義深い人材を発掘しています。マカルピンは伝道で出会った愛知県立第三中学校(現・愛知県立津島高等学校)の教諭 市村興市を金城女学校に招聘しました。当時のミッション内部で市村を支持する者は少なく、強い反対もありましたが、マカルピンの説得によって市村は教頭として招かれ、新しい計画を打ち出していきました。1917年(大正6)校長に就任しています。

市村は学外に向けて女子の高等教育の必要性を訴え、金城女学校後援会を発足。「私立金城女学校専門学部設立趣意書」を発表すると大反響が起り、創立以来ミッションが注いできた総額をしのぐほど多額の寄付金が集まりました。市村はそれで隣地を購入し、校舎を新築。定員の増員、就業年限の改定を行ないました。1927年(昭和2)金城女子専門学校が開校されると同時に、学校運営はミッションから日本基督教会大会に委譲され、ミッションスクールからクリスチャンスクールになりました。校主(理事長)となった宣教師 ラングストン・スマイスは市村を支え、専門学校設立に必要な基金に私財を捧げています。

1945年(昭和20)の戦火で、校舎のほとんどを焼失しましたが、復興と同時に金城学院大学の構想を掲げ、1949年(昭和24)英文学科を誕生させています。市村は、まさに金城学院の中興の祖として献身したのです。



創立者 Anny P.E. Randolph (1827~1902年)
「女子に学問は無用」といわれていた時代に、
名古屋に女子教育の種を蒔きました。